

テーマ：図書館とは何か～校閲者から見えること～

講師：(株)鷗来堂 代表取締役社長 柳下 恭平 氏



平成29年8月29日（火）東京都立中央図書館において開催されたT L A講演会を再構成してまとめたものです。

○「図書館とは何か」を考えてみる

私は、校閲の仕事を2006年に創業しました。校閲の仕事を平たく言いますと、間違いを見つける仕事、文章や情報が世に出る前に間違いを見つける仕事です。

今日は、図書館の職員の方を前にして、大上段に「図書館とは何か」という仰々しいタイトルをつけさせてもらいました。我々校閲者は本当に図書館をよく利用させていただきます。今回、図書館というものをあらためて考える機会をいただいたと思っております。

今回のお話をいただいてから、仕事の打合せの場所や飲みの席などで、いろいろな人に「図書館って何？」、「図書館って何をするとところ？」、と聞いてきました。99%と言ってもいいくらいの皆さんが、一瞬つまるのですけれども、「本を借りるところ」と返してくださいました。また、こう答えてから、「本を読むところなのかな」と加えるような答えが返ってくることもありました。

地方と東京では違うかもしれませんが、滞在するところという目的があるのかもしれない。

滞在するところと答えた人は1人もいなかったのですが、いろいろな図書館を見てきて、滞在を目的とする人って実はいるのではないのでしょうか。

特に東京都内だと、30分、1時間の時間を潰すという需要があるのではないかなと思います。コーヒーショップに行くときは、もちろんコーヒーを飲むことが目的なのですが、コーヒーを飲むに附属した時間を過ごすというののもかなり重要な時間と考えられます。東京都内やまちの中というのは、実はこうしたニーズがあるのではないかと思います。

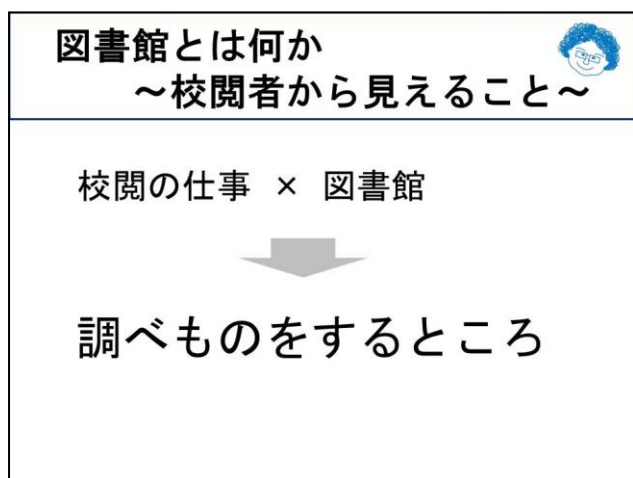
○校閲の仕事と図書館

校閲の仕事は間違いを見つける仕事とお話ししましたが、間違いにはいろいろな種類があります。まず、ボコッと文字が抜けている脱字。逆に、文字が入っているもの、「したためる」が「したたためる」になっている間違い。「衍字（えんじ）」です。そして漢字の誤変換。「～する傾向である」というものが蛍光灯の「蛍光」になっているといった間違いです。また、例えば、関西弁といっても、神戸と京都と大阪で違いますし、大阪だけでも船場と河内と岸和田では全然言葉が違います。こういうものの差異を見つけたりするのも間違いにあたります。皆さんの中で、砂場などで穴を掘るときに、片手で持って掘るものをスコップと言う方はいらっしゃいますか。（該当者挙手）逆にそれがシャベルだよという方は。（該当者挙手）あ



りがとうございます。これは東と西で分かれているはずですが。実際にあった話で、お客様が自信満々に「スコップ」と書いているのは、僕にとってはシャベルで、「これはシャベルじゃないのですか」と書いたら、その方が関西の方で、「これはスコップというのです」と。また、「お江戸日本橋（にほんばし）」と、大阪にも「日本橋（にっぽんばし）」という地名があったりしますね。同じ漢字でも読み方が違うなどの細かく、またさまざまな間違いを校閲で拾ってきます。

校閲の仕事で図書館を使わせていただくというのは、ここに書いてある調べものなのです。僕が仕事で一番利用させていただくのが、こちらの都立中央図書館です。閲覧するときに、広い作業机と広い空間があるので、作業効率が全然違います。



例えば、文章を引用して「この本にはこう書かれていました」と書いてあったときに、本当にそのとおりに引用されているのかを調べます。著者さんは頭の中にある世界を書き起こすことが仕事ですから、夕日が2回落ちたり、ジャケットを2回脱いだりとかよくあるのです。また、東南アジアじゃないからまずあり得ないのに、自転車に2人乗った後になぜかもう1人乗っちゃって、なぜか3人乗っていたというようなこともあります。作家さんにとってはご自身の美意識を紙に書き起

こすことが仕事です。もちろん間違えないほうがいいですけども、それを客観的に見るのが我々校閲なのです。引用とかも、作家さんが、元の文章を参照しながら執筆されるときに、例えば、スライドの「図書館とは何か」。「～校閲者から見えること～」のこの「見える」が平仮名になっているなどということはよくあります。

資料参照という概念で言うと、元の資料から引用された文章などが、もともとは漢字なのに、最初の引用時に間違えて平仮名にしてしまって、次にそれを孫引きしたときに平仮名で引用してしまうと、その後全部が間違っていってしまいます。ですから、とにかく原典に忠実であるべきです。たまにありますが、原著、底本に誤植や間違いがあるときには、振り仮名で、片仮名の「ママ」と書いて、「原著に間違いがあるのは分かっているけれど、そのまま引用しました」ということを表すぐらい、引用確認というのをします。

引用確認をするときに、著者さんがそのゲラに引用した本をつけてくれて、付箋を貼ってくださって、「ああ、ここを見ればいいのだな」とやれば仕事は楽なのですけれども、そんなことはまずありません。こんなときに図書館に行くのです。つまり、それが筑摩版なのか岩波版なのか、初刷りなのか二刷りなのか、底本に何を使ったのかというのは明記しなければいけないので、著者指定の底本がなければ、一番オリジナルの、最初に出た版、最初に出た刷りのもので確認します。

そのときに、まずインターネットを使って、東京都内の縦覧検索をして、都内のどこにこの本があるかを調べます。そして、なるべく固まっている図書館に行って、どのように引用されているかを調べていきます。

余談ですが、我々校閲の特技なのですけれども、500ページを超える本の中から、この「図書館とは

何か〜校閲者から見えること〜」のたった2行あるいは1行を探さなくてはいけないことがあります。これを拾うのにはコツがありまして、あえて文字として見ずにグラフィックとして見るのがコツです。僕だったらのやり方をごく簡単に言うと、漢字は黒く、平仮名は白く見えます。「図書館とは何か〜校閲者から見えること〜」の「見えること」のあたりが4文字平仮名が続いていますね。「〜」、「黒い3文字」、「白い2文字」、「白い4文字」、「〜」のようなものを頭の中で文字としてではなく、ビジュアル化します。それをバーッとスキャンするような形で拾うと、500ページの中からたった1行の引用文でもすごくやりやすく探せるのです。ただ、実生活では全く使わない技術です。

もう1つは事実確認。実は、インターネットで調べられることも多いのです。最近では、お店の店名や電話番号、住所などは、速報性が高いインターネットのほうが調べやすく、間違いがないです。以前は電話帳で調べたりしていましたが、今はインターネットに主戦場が移っています。あとは企業の名前や、企業の商品なども、インターネットのほうが早いし正確です。あと、法律が施行・公布されたときには、六法全書よりインターネットが早くて正確なので、そちらを使っています。けれども、そうでない調べもの、まだまだ紙にしかない調べものもたくさんあります。例えば、平安時代の天気などのように、ネットに載っていないことを調べるときに、図書館に通います。「忠臣蔵」について書いてある本は、忠臣蔵の関連図書がたくさんあるところが当然調べやすいです。テーマが決まっている本や資料を調べるときには、図書館での作業効率は高いです。

話が長くなりましたが、図書館とは何か。

僕も一般ユーザーの一人ですので、「図書館とは、市民、これは町民であれ区民であれ、市民が

読書、閲覧などで本を利用できる場所」と、外枠として定義してから、僕は図書館と校閲について考え始めました。

校閲にとっては本当に一択で、完全に商用で、調べものをするところです。調べもののときに、蔵書数、検索性、作業動線というものが確保されていないと、校閲者にとっての図書館は機能しなくなってしまうのです。

○図書館の特徴による校閲者の使い分け

図書館の種類、僕が思いつく限りでこんな種類があるのかなと挙げてみます。

図書館とは何か
〜校閲者から見えること〜



○図書館の種類
思いつくまま…

- ・ 国立国会図書館
- ・ 都道府県立図書館
- ・ 市区町村立図書館
- ・ 大学図書館
- ・ 企業内図書館
- ・ 専門図書館

国立国会図書館、都立や市区町村立の図書館、この辺からだんだんクローズドになってきますね。大学図書館、あと、一番クローズドなのは企業内図書館です。そしてたまにはありますが、すごくお世話になっているのが専門図書館です。

こう考えてみると、結構図書館を使い分けているのだと思いました。国立国会図書館は基本的には全ての本があるのですが、閉架が多いです。コピーを取るにしても手続きの書類が結構大変です。これは文句ではなく、ある本の巻末の文献から次々にリンクしていく調べ方をする時に、手続きに時間がかかるので、作業効率だけで言うと骨が折れるのです。だから、国立国会にしかない本を見に行くというような使い方をしています。対して、都立図書館、都内の図書館は、我々の会社が

神楽坂という飯田橋近くにあるエリアなので、電車に乗っていくことは必ずしており、利用頻度は高いです。縦覧検索でどこに蔵書があるかということも調べられますし、数日こもって仕事をするのにもすごく良いです。

スライドでは市区町村立図書館と区分していますがけれども、遠方の図書館という言い方で今回はくくらせてください。例えば、山内一豊のことを調べたかったら、やはり高知の図書館は強いです。古文書レベルの資料も含めて、地方の民俗学的な蔵書が厚い図書館というのは、すごく頼りになります。エリアの専門図書館として他府県の図書館あるいは地域資料のある図書館というのは、予算と締め切りの時間が許せば行ってでも調べたいところです。行けない場合は著者さんに「ここにこういう図書館があって、きっとそこで調べられると思います」という書き方をして、あとは取材として行ってもらうようにします。

大学図書館は、個人的にはコピー機が使いやすくていいですね。学生さんが利用されるので、2台、3台あるところも多いと思います。校閲が仕事で図書館の本や資料を使うときに、資料を確認して、「うん、間違いはない」では終われません。もとの資料のコピーを取って、ゲラの該当箇所に書き込んで、そのコピーしたところに蛍光ペンで、「この箇所にこう書いてあったから根拠はこうじゃないですか」と書き込みます。だから、ものによっては本の厚みが2センチなのに、資料の厚みが広辞苑2冊分ぐらいになったりします。特に歴史ものとか地理をまたぐようなものは資料が膨大になることが多いです。

そのときに大学図書館では、我社が神楽坂にあるということもあって、例えば法政大学、東京大学、早稲田大学などの大学図書館を使わせていただいています。これは本当に地味に作業効率、机が

あって、その横にプリンターがあって、サッと書いてパッと取れるのが良いですね。私が使いやすい仕様にしていただく必要は全くないのですけれども、こういうゲーム性が、実は仕事をしているときにはとても大事です。

あと、これもわがままですけど、コピー機のそばでは仕事をしたくないです。コピー機の動く音はうるさいので、机からちょっと離れたところにコピー機があって、アクセスがよくて、その前に大きく広げることができる作業机があると、環境としてはもう最高です。

次の企業内図書館は、実は1回しか使ったことがありません。というのも大体が入れないからなのです。使った1回というのは、その企業さんの50年史を編纂するときに、その企業のことを調べなきゃいけないというところで、実際にお邪魔して入り込んだということがありました。

それから出版社の底本室ですね。原本室と言ったりします。例えば、講談社さんだったらマガジンが、新潮社さんだったら『週刊新潮』のバックナンバーが基本的に揃っています。出版社は基本的に自分たちが出版した本は揃えているので、一番使う企業内図書館は、実は版元の原本室だったりします。

専門図書館はさらにニッチですよ。四ツ谷にある消防博物館ですとか。一番良かったのは、神田に昔、交通博物館がありました。今は鉄道博物館として大宮に移ってしまったのですけれども、都内にあってほしかったです。時刻表がバックナンバーも含めてほぼ全部調べられたので、時刻表ミステリーをやるときには、そこに行けば一発で全部揃えられたのです。

専門図書館、もう文字どおり専門図書館で、これについて調べたい、東京ドームのところにも野球専門の本屋さんがあったりしますね。そういう

ところで調べると一発で調べられます。こういう専門図書館、専門書店は、ニッチなときにビシッとハマるとパッと仕事が終わるという、本当にありがたい存在です。

こんな分類、僕が思いつくものを挙げてみたのですけれども、他にこんな図書館がありますよいうのがありますでしょうか。私の図書館はこうだぞとかいうのがありましたら、どうぞ。

○フロアA氏 校閲ではお使いになれないですけれども、学校図書館があります。

○柳下 学校図書館、失礼しました。そうですね、学校図書館がありましたね。大学図書館は挙げていましたけれども、小学校、中学校、高校にある図書館、図書室ですね。すみません、漏れていました。申し訳ない、思いつかなかったな、ああ、悔しい。ありがとうございます。

もう一回あらためて、校閲は図書館をどのように使うのかというと、調べものをする場合に、蔵書数、そして検索性、これは閉架、開架そういうのも含めますね。あと、作業動線。コピー機などの物理的なものから、何冊手元に置いておけるか、こうしたことも含めてです。それがかなり大切になってきて、振り返ってみると、このようにいろいろな図書館を使い分けていることが分かりました。

○出版業界と図書館

では、再び、図書館とは何か。事前に事務局からいただいた質問を見てみましょう。「出版、編集、校閲、取次、書店、それぞれの領域は独自の文化・ルールがあり、それが利潤と結びついているが、図書館は図書や資料というものでそれらを横断し、さらに利潤とは直接的には無縁であるという特徴・役割を備えている」と、事前の打合せ時に話をしました。

図書館とは何か

～校閲者から見えること～



問 1

「出版、編集、校閲、取次、書店それぞれの領域は独自の文化・ルールがあり、それが利潤と結びついているが、図書館は図書や資料というモノでそれらを横断し、さらに利潤とは直接的には無縁であるという特徴・役割を備えている」とお考えの点を、もう少し掘り下げておうかがいたい。

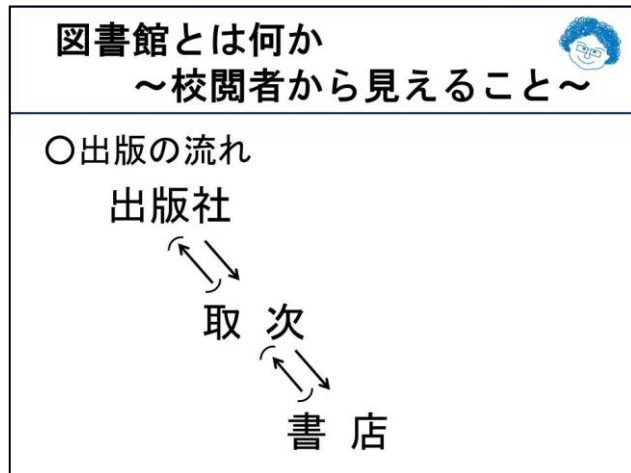
僕は、ずっと本を作る仕事をしてきました。編集、デザイン、そして校閲です。鷗来堂も、メインのお客さんは校閲部と編集部の方でした。ところが、2年半ぐらい前に「かもめブックス」という本屋さんを作りまして、書店というものに触れてみると、見える世界がガラッと違って本当に面白かったのです。まず、出版業界と書店業界は違う業界だと思いました。今まで編集さんばかりがなじみだったのが、編集さんとは書店からはほとんど会うことは無くなり、デイリーのやりとりは出版社の営業さんとなりました。

先ほど、「図書館は我々市民が読書や閲覧などで本を利用できる場所である」と定義しました。文字どおり、本を買う場所ではありません。本を利用できる場所と本を買う場所が、出版業界、書店業界、流通業界、取次とは違うところ、二軸化あるいは別軸化しているのではと、書店を始めて考えたことです。

本の出版から書店までの流れの構図は縦に割られていて、あまり横の交流がありません。そして、本屋さんは営業部とはあるのですけれども、編集、出版社との交流はあまりない。取次との交流もあまりない。想像するに、図書館と出版社、図書館と流通、図書館と本屋さんもあり交流がないのではと思っています。絵本とか児童書を作る出版社さんは、図書館用の流通に卸したりする

ので、そういう商業的な交流はあるかもしれないですけども、文化的な、どうやってイベントをつくろうとか、こうした草の根の交流があまりないのではないかと思うようになりました。

出版、流通というところでお話すると、まず、本を作る一番の川上、このスライドの出版社から出る矢印が本の流れだと思ってください。



出版社が一度、取次という流通会社に作った本を渡します。そうすると、取次が全国の書店にその本を卸します。書店では、それをユーザー、読者に売っていくというのがシンプルな縦の流れです。本というのは、再版委託制度という独占禁止法の特別ルールに守られているので、返本が、委託処分になります。なので、売れなかったものという聞こえが悪いのですが、動かなくなったものを逆の経路で出版社に戻っていくというのが括弧の流れです。極論ですが、マネタイズが違うと考えられます。それぞれの場所で何で儲けようとしているかが違うのではないかと、全部の業種を見て、最近思っています。

出版社というのは、当然、本を作って売ることので儲けようとしています。今、1日で土日を除けば240点ぐらいの新刊が出ていると言われています。出版点数というのは、2002年ぐらいからどんどん増加しています。出版の売り上げ自体は1997年には

2兆6,000億円ぐらいあったのが、2017年度は1兆5,000億円ぐらいまで下がっていますが、出版点数、本の数は増えています。なぜ本の数が増えているかというとマネタイズ、つまり、出版社は本を作って、流通に卸す。また、取次は、物流というものを動かす機能と、商流というお金を回収する機能があって、3,000冊この本を作りましたという、出版社には6カ月後に取次から3,000冊分のお金が入ってくるのです。その瞬間は、その本が売れるか売れないかはあまり関係ないのです。言い方は悪いですけども、本を販売ルートに乗せれば、6カ月後にマネタイズされるのです。

ですから、極論ですけども、出版社というのは本を出版することによって、マネタイズします。取次は、仕入れたこの本を、全国北から南まで本を動かすことによって、本の定価の約7%の利益を得ています。書店は、その本を売ることにより現金化します。このように見ると、それぞれ違う業種なのです。これはあくまで極論なので、このまま単純に鵜呑みにしないでください。というのも、実は補足がいっぱいあるのです。なぜ出版点数が増えたのか、なぜ委託なのか、そもそも本の刷り部数が減ってきていて、例えば文芸だったら4,000部を切る出版社がすごく増えています。全国の書店の数は1万2,000件ぐらいあるので、4,000部の初刷りだと全国に行き渡らないので、東京とか大阪ぐらいにしか行かないなど、さまざまな要素や状況がある中で、ものすごく簡略化したらということなので、注意してください。

目標達成という観点で見た場合、図書館の場合は来館者数とか、閲覧数とか、貸出数とか、どれだけの人が読んでくれたかというところで、マネタイズではなく福利厚生を目標にしています。だから、本を売ろうとしているところと、本というものを福利厚生に使っているところで、違う業界

だと捉えた方が良くのではないかと思います。

もともとの質問に戻ると、「出版、取次、書店、それぞれの領域は独自の文化やルールがあって、それが利潤と結びついている。だけれども、図書館というのは図書や資料というものを横断していて、さらに利潤とは直接的に無縁であるという特徴や役割を備えている」、僕はこのように思っています。では、図書館はマネタイズしなくてもいいのかと言えば、それは少し違う気がします。少子化を例にしましょう。この中で唯一、少子化があまり関係ないのは出版社です。自分たちが作ったコンテンツを、例えば英語や中国語、韓国語などのコンテンツとして海外に輸出できるので、出版社にとっては少子化がイコール、ストレートな問題ではないのですが、流通や書店、そして図書館。図書館は目的達成の軸が違うのですが、人の数が減るということイコール、マーケットの規模の縮小につながっていきます。

前のスライドを見てください。本というのは、この左側のマネタイズのほうは本を売るというのを目的としているので、単純に高く売ればいい、粗利を出せばいい、そういう世界なのですけれども、図書館の場合は福利厚生ですので、どう利用してもらったかというのがとても大事であって、そもそもマネタイズを目的としていません。僕は、図書館の利用者であって運営者ではないので、これに気付いたときにすごく愕然としました。一般の皆さんにとっても自分の家の本棚に置くには限りがありますから、全ての本を買うわけにはいきません。僕も小学校の頃は図書館に相当お世話になって、そこで本を読むという習慣を得たと考えています。僕が勝手にハッピーマック理論と呼んでいるのですが、マクドナルドのハッピーセット、これって子供はセットでついている小さなおもちゃ欲しさにハッピーセットが欲しくなります。こ

れはすごく正しい戦略なのです。つまり、小さいころからマクドナルドの味を食べていないで、いきなり35歳を過ぎてからマックを食べても美味しいとは思いません。このように、習慣が生活の中にどこまで溶け込んでいるかというのはすごく大事で、本においては、学校図書館や学級図書が活字の入口として正しく機能していることが期待されていると思います。



○IT等の進展と図書館

またまたあらためて、図書館とは何かに戻ります。「今後、10年から20年先を考えると、電子書籍、ネット、AIなど、図書や出版をめぐる環境が著しく変化することが予想される。このあたりの動向、変化のスピード、一般化イコール、ほとんどの人がその恩恵を受けることが可能な状態の到来時期などについてご存知の範囲でお伺いしたい」という質問をいただいています。

図書館とは何か ～校閲者から見えること～



問2

今後10年から20年先を考えると、電子書籍、ネット、AIなど、図書や出版をめぐる環境が著しく変化することが予想される。このあたりの動向、変化のスピード、一般化（＝ほとんどの人がその恩恵を受けることが可能な状態）の到来時期などについて、ご存知の範囲でお伺いしたい。

個人的な話ですが、僕には娘がおりまして、色々なテーマの家族会議を行っています。スマートフォンをいつ与えるかということもその一つです。14世紀のイタリアの芸術評論家が、『第七芸術宣言』という本に、芸術には、文学、音楽、舞踏、建築など6種類の芸術があつて、映画は第7番目の芸術だと宣言しています。これはすごく面白い考えだと思っています。人類の芸術史というものがあつて、例えば、何か声を出すだけ、体をたたくだけでリズムが生まれて歌ができたりするので、音楽というのは相当プリミティブな芸術です。また、積み木は建築に近いですね。粘土でものを作ったりとか、レゴで何かを作ったりというのがあります。文章を書いたり、お芝居をしたり。僕は、子供に何かを与えるときには、人類の芸術史のとおりに1回与えてみたいと思ったのです。

なぜかという、逆戻りはできないだろうと思ったからです。最初からファミコンをやっていて、その後に文学や音楽になかなか行きにくいのではないかと。そういう意味では、原始的な芸術というものから順番に流れていて、その先に現代的な芸術というものがある。この考えがなかなか気に入ったものですから、その芸術を順番に与えた先に自分で判断してスマートフォンやインターネットを使えばいいと思っています。

子供がピーピー泣いていたときに、YouTubeで動画を見せるとピタッと泣きやむのでめちゃくちゃ楽なのはすごくわかるのです。それは当然だと思っているので、親御さんを責めるわけではなく、それだけやってしまうと、やっぱり本は読めないだろうなと思います。こういう順番を飛ばしてしまいやすいというのが、現代の潮流ではないかとも思っています。

質問に戻ります。一般化になる時期、一般化の到来時期は、実は既に来ているのではないかと思います。

っています。電子書籍やネットや人工知能、AIなどは、それぞれとても面白いものだと思っています。使えるところは使ったほうがいいし、過度に恐れる必要も、過度に期待する必要もないと思っています。例えば、電子書籍は、僕、2010年の8カ月ぐらいは全部試しにKindleで文章を読んできました。結論としては、僕は紙の教科書で教育を受けたので、紙の検索性はまだまだすごく高いと思っています。けれども、電子書籍で面白いなど思ったことが2つあります。1つはこの電子書籍で読んでいる間、1.6倍ぐらいの本を読んだのです。この読書体験は文学全集にすごく似ています。つまり、判型が揃っていて、文字組が統一されている。文学全集というのは学術的な目的のために、作られたものでもあるので、読みやすく、量をものすごくたくさん読めるし、文字を拾いやすいのです。先ほどの校閲の検索をするときも、同じ背景で判型が揃っていると検索性がすごく高いのです。紙の本は、文庫でも、例えば38文字掛ける16行のものもあれば、42文字掛ける19行のものもあります。そして、判型も違います。文庫判もあればA4判もあれば四六判もあります。判型が違えば文字組も違ってきて、その本に最適な組み方をしています。でも、ザーッと量を読もうとすると読みにくい。それぞれカスタマイズした紙の本は、すごく編集されていると思ったのです。電子書籍用に編集された本が少ないというのもあるかもしれません。インターネットで「comico」という漫画アプリがあるのですが、それはコマ割りではなくて縦スクロールの漫画になっています。また、『ReLIFE』という、デジタルスタートで初めて100万部を突破した漫画の紙版が出ました。デジタルネイティブで生まれた漫画が紙になったという、今までとは逆の面白い流れですけれども、ほとんどの電子書籍は、もともと紙用に編集された

ものをたまたま読めるようにしていただけという状態なので、まだまだ読みにくいのです。だからこの先、例えば、Webクリエイター、IT関係の人たちが、出版社の持っている編集的技術を身につけて、電子書籍用のコンテンツとして電子書籍を作るようになったときに、本当の意味で面白い電子書籍が生まれてくると思っています。

例えば、漫画の見開きは、右開き、日本語の場合だと右から左に読むので、攻める側のロボットがずっと左側を向いていて、やられているほうのロボットがずっと右側を向いていると、躍動感のある攻め、戦闘のシーンが描けるとか、それもその紙の見開きというものをうまく利用したコマ割りなのですね。あと、宇宙空間を見開きでドーンと大きくしたい場合は、その前の2ページで、一番右肩はコマが大きく、だんだん、だんだん左隅に行くにつれて小さくし、一番小さくした状態で、次の見開きでドーンと1画面にすると、最大限大きく見せられるというペーパーネイティブの技法なのです。手塚治虫さんのトキワ荘で生まれてきたペーパーネイティブの漫画技術というものが、電子書籍で新しいものが生まれているという時代でもあって、それが電子書籍ネイティブの子たちが漫画を書き始めたりしたときに、だんだん切りかわって、共存していくのだらうと思っています。

人工知能、AI、これも実は技術です。「ご存知の範囲でお伺いしたい。」という文章の行末の「。」は、人間よりも機械が拾ったほうが拾いやすいのです。コンピュータ的な言い方をすると、文字データがあって、最後に改行コードの前に「。」がなければポップアップする。改行コードの前に必ず「。」があるというのを検索すれば、行末の「。」というのは全部拾えます。これはコンピュータのほうが得意な校閲です。「マシンが校閲をするときがやってきたらどうしますか」という質問をよく

受けます。これについてもあまり心配していなくて、マシンが校閲をやるときは、多分、マシンが小説を書いている時代だと思います。だから、コンテンツが自動的に生成されるという時代が来たときには、機械が作るコンテンツを楽しめばいいだけです。それでも我々は、多分、絵を書いたり文章を書いたりする生き物だと思うのです。その芸術論や技術論に関しても、実はそれほど今と変わらず楽しめるのではないかなと思っており、状況が目まぐるしく変化するものに関しては、それほど不安は持っていません。むしろどんどん便利になっていくのだらうと思っています。検索も、AIが検索してくれたら、すごく便利な検索になっていくのではと思っています。

○図書館が備えるべき機能を考える

質問の最後です。「上記に関連して、人々はパソコンやスマートフォンでいつでもどこでも誰でも簡単にいろいろな情報や図書、資料を見たり得ることが可能になることが予想される中で、各種の図書館は図書や資料を収集、保存、提供する本来的、本質的な機能に加えて、どのような役割を持ってどのような機能を付加して備えることが必要だと考えられるか、私見で構わないのでお伺いしたい」ということもいただきました。

図書館とは何か ～校閲者から見えること～



問3

上記に関連して、人々はパソコンやスマホで、いつでもどこでも誰でも、簡単に、いろいろな情報や図書、資料を見たり、得ることが可能になることが予想される中で、各種の図書館は図書や資料を収集・保存・提供する本来的・本質的な機能に加えて、どのような役割を持って、どのような機能を付加して備えることが必要だと考えられるか、私見で構わないのでお伺いしたい。

これに関しては先ほどお話しした、「滞在するところ」というのが、実は本当に大きな機能ではないかと思っています。滞在は、例えばカフェやホテルのラウンジでもできます。ですが、図書館には本があって、本という媒体を通した滞在する目的が作りやすい場所です。図書館は、本を使って空間を提供する場所だと。滞在するところという機能を最大限に生かしていくというのが、どのような役割を持って、どのような機能を付加して備えることが必要だと思うか、考えられるかが、僕からの答えになります。

僕からの話はここまでにして、ここから皆さんの質問をお受けしようと思います。

《質疑応答》

○柳下 学校図書館の方におたずねします。図書館というものは、出版だったり、本屋だったり、流通だったりと違う業種としてあまり絡めていないのではと思っていますが、いかがでしょうか。

○参加者B氏 学校図書館は、出版社、取次、書店とはほとんどかわりがないのが正直なところかと思います。学校図書館の立場からすると、本というのは書店さんから注文したら届くものであって、それ以上でもそれ以下でもない。だから、我々学校図書館員が取次、出版社と組んでコンテンツを新たに作るとか、あるいは取次と組んで新しい本のルートを作っていくとか、そういうことは聞いたこともない。

また、それが個人的にはすごく不満で、編集の方、営業の方、それから書店員さん、同じものを扱って、同じように社会の中に本を手渡していく、他の人に本を手渡していくということでは同じ仕事をしているはずなのに、そこの横のつながりがない、それで横のつながりがないからお互い理解できない。だから逆に、いろいろな意味で図書館が出版業界を圧迫しているというのも、こういう

ところから出てくる誤解なのかなと思います。

○柳下 今の最後のお話。鷗来堂は神楽坂の矢来町にありまして、新潮社もあります。佐藤さんという方が社長で、去年だったと思いますが、図書館をちょっと批判するような発言、つまり、売るものを貸し出しているのに、その分本が売れなくなる、すごく簡単に言うと、そういうことを言っていました。

例えば、村上春樹さんの本が図書館で200人待ちが起きていると単純に200冊売れないじゃないかというシンプルな理屈です。僕はどちらかの立場に立つつもりはありませんが、個人では全ての本は買えないというのが、すごく率直な言い方です。これは図書館寄りですね。2年待つのがあったら買ってもいいなというのが個人的な思いでもあります。これは意見としては出版社寄りですね。

この議論であまり出ていないと思うのは、そもそも出版社の初刷りが4,000部を切り始めていて、全国に本が届いていない状態なのです。そもそも図書館と本屋さんとの接点がどんどん無くなっている中で、特にここ10年は出版社を絡めた共存がしにくくなって、という点が、ほとんど議論に上っていない気がしています。最初から6,000部、7,000部を刷っていたら、そもそもそんな話にならないのではないか、ということが抜けている気がします。

本当に本を作ることをマネタイズにしてしまうと、本を売るということと乖離して、さらに本を利用して閲覧するということと乖離してしまうということが、今回、図書館とは何かについて、業界のことと関連させて考えて、見えてきたことです。

○参加者C氏 図書館には図書館員、司書という人間がいて、図書館サービスを提供するという非常に重要な役割があります。校閲者が調べる場合

には自分で調べないとだめなのでしょうか。

それから、図書館員が媒体となっていていろいろなサービスが提供されていて、図書館員に会いに行くというのも、利用者にとってはすごく大事なことになるのではないかと思います。批判があるかもしれませんが、指定管理者制度が導入されてそういうところが少し弱くなっている図書館もあるように思うのですけれども、こうした点についてもご意見をお聞きしたいです。

○柳下 1つ目のレファレンスについては、僕はあまり利用していません。それは使いにくいとか使いたくないとかではありません。校閲の調べ方では、例えば、忠臣蔵を調べるとき、まず基礎資料だと思われているものを見ます。その巻末に参考資料がずらっと並んでいますから、そこをまずリンクしていきます。その先で4、5冊ぐらい見ていくと、「この本とこの本も参照しなくては」と、また基礎資料の基礎資料みたいなものが出てきて、それをたどっていく。この巻末のリンクをたどること自体が、調べることに繋がっていきます。自分の知らない、こんな資料があるというものを教えてくれるという点では、レファレンスの役割として重要です。時間短縮にはなりますが、たどること自体が仕事の内容に関わってきますので、結果的に使わないということになります。逆に、作家さんはレファレンスを使っている方が多いと思います。「こんなこと調べたいけど、何かいい本ないかな」という大雑把な相談でもきちん

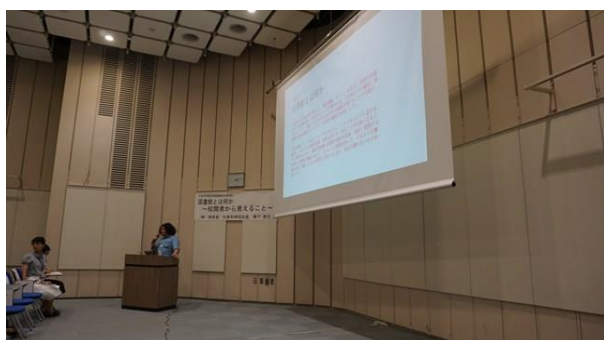
と調べて、情報を揃えて提供してくれるようなスーパーマンもいらっしゃると思うので、図書館の財産は本当の意味で言うとその司書さんだと考えています。

2つ目のご質問です。書店の話をさせていただくと、ナショナルチェーン、例えば、紀伊國屋書店や丸善などの大型書店と、かもめブックスや個人でやっている店などのインディペンデント、独立系書店という2つがあると思うのです。図書館というのは、本来の意味でナショナルチェーンでしかあり得ません。これは規模的な話で、そもそも蔵書を持つというところから始めないといけません。学校図書館はその点で独立系かもしれません。そのエリアの、地元の本を揃えるなど、特色性を出しやすいし、規模も小さく作りやすいです。この人に会いに行く、こういうコミュニケーションを作る、こういうコミュニティを作る、というようなときには、ナショナルチェーンよりもインディペンデント、独立系がやりやすいです。単純に、いつもあの人がいるというレベルが作りやすいということです。

先ほど指定管理者の話はされましたが、やはりアウトソースすればするほど、「いつもこの人いるね」という状態が作りにくく、宿命的にこういうコミュニケーションを作りにくくなっていくと思います。だからといって、できないわけではないとも思うのです。

さて、指定管理者制度。このニュース自体はいろいろな話が出ているようですけれども、図書館ではあまりいいことではないとされているのでしょうか。

○参加者D氏 今までは行政が直営する図書館が多かったのですが、その自治体の職員が運営していたものを、包括的な外部委託という形で、民間業者さんをお願いするという形になります。図書



館の数自体は増えてきていて、この形を取る図書館の数も増えてきていますが、図書館の運営方法としては、まだ新しい形だと言えらると思います。○柳下 本棚の肥やしという言葉がありますが、10年間全く利用されていない本が、たまにはあってもすごく役に立つことがあるのが資料の大事さです。角川の地名辞典も、今はほとんど使わないのですけれども、この地名のこの字の形が見たいというときに役立つのです。それを、営利目的にしていくと、おそらく置いておけませんね。国会図書館がその役割を果たすのかもしれませんが、もう少し開かれて、身近な場所で調べられるとうれしいです。

○参加者E氏 2点、お伺いします。1つは、校閲での活用としてのデジタルアーカイブの可能性についてお聞きしたいです。2つ目は、図書館は活字文化を広げることにも取り組めばいいのではないかと考えています。書店と組んだイベントなどをもっとやればいいと思っている中でお伺いしたいのが、鷗来堂としての視点と、かもめボックスからの視点で、活字ファンを増やす企画のヒントをぜひ教えていただきたいです。

○柳下 1つ目です。デジタルアーカイブ、ちょっと枕を添えると、僕、ハードディスクの写真とかが捨てられません。いつまでたってもハードディスクを整理できないのです。これを自分の中で正当化しようと考えたのが、これは死に対する恐怖なのではないかと思うようになりました。ハードディスクというのは記憶そのものなので、記憶を失うということは、根源的な人間の死に対する恐怖なのではないかというへ理屈をつけて、写真は整理しなくてもいいのだと結論づけてます。

デジタルアーカイブというのは、それに近いものを感じていて、AIは今はテキストデータが主流ですけれども、今後、画像検索、音声検索、色

彩検索など、いろいろなことが検索できるようになってくると、デジタルアーカイブの総量によってナレッジが高まっていくということが起きてきます。例えば、痛ましい話ですけれども、3.11の震災でおじいちゃんの記事が流されてしまった、というようなこともデジタルアーカイブさえしておけば、後から検索がしやすくなります。「とりあえずとっておく」と言うのと急に聞こえが悪くなりますけれども、とりあえずアーカイブしておくことで、後でできることが増えるのではないかと思います。例えば、著作権には触れない程度に本の画像だけ撮っておけば、あとからOCRでテキストデータができますし、画像として保存しておくことで、文字を見るのではなくて、昔の本のデザインがアーカイブされることがあるかもしれません。テキストデータの場合、ルビのデータも現状のものをそのままアーカイブすることがすごく大事です。世界中のウェブサイトアーカイブすることを行っている人たちがいますが、このことは、僕には永遠の命に対する挑戦みたいな感じがするのです。バーチャルなその時代を後でテクスチャー、ARでもIRでもいいのですけれども、作っていくことができる。こういうことに僕は非常に夢とロマンを感じます。これが1つ目です。

2つ目が、活字文化を発展させるための面白い企画です。これはいろいろな切り口があると思います。先日、築地あたりの安いあるお寿司屋に行きました。魚偏に「旨い」と書いて鮭、「ああなるほど」と思い、さらに、手偏に「旨い」で「指」なんですね。平仮名、片仮名、漢字、加えて大和言葉とか、ルビとか、そういうものをひもといていくイベントは非常に楽しそう、聞いてみたいと思います。

それから、児童書の編集さんから聞いた話です

が、「児童書というのは作るのが難しいもので、読むのは子供だけれども、買うのは大人ですから、子供に面白くて大人に買わせる本を作らないと児童書は成り立たない」のだそうです。さらに、この編集さんが「振り仮名を振ればとりあえず読めるようになるけれども、本を開いたときに黒い感じだと、子供は嫌気がさすので、適度に平仮名にします」と話してくれました。この漢字を平仮名にすることを「開く」というのですけれども、適度に開いて、適度に閉じています。小学3年生の本だからといって、3年生以下の漢字を全部、閉じればいいわけではなくて、平仮名と漢字とコントロールして、どう読むか。音読もできるようにするし、黙読もできるようにします。こういう話も面白いと思います。

また、日本の活字のすばらしさを1つ、ご紹介しましょう。昔の活版というのは、四角い正方形のスペースを使いまして、これを仮想ボディといいます。漢数字の一を想像していただくと、仮想ボディが広いですね。英語のIやLの小文字は仮想ボディが狭く、Lの大文字は仮想ボディが広く、いろいろな仮想ボディがあるので、英語は組版がきちんとおさまらないことになります。活字という観点でいくと、こんな話も僕はかなり好きです。

異体字の話も面白いです。この「柳」という字、これは新字の「柳」とちょっと違いますよね。鷗来堂の偏の中が、品川の「品」だったり、カタカナの「メ」だったりしますね。この異体字というのは歴史が古くて、例えば、土方歳三さんの「土」に点が付くことと付かないことがあります。それも本家は点がないのですけれども、分家は本家から東北の方向に家があるから点がそうになっているなど、手書き文字だからできた異体字がたくさんあります。あとNECとか富士通がJIS字体という字体を作りやがって、ちょっと大混乱を起こ

した後に、マイクロソフトがメイリオというものを作りやがりました。今、「作りやがって」とあえて表現したのは、彼らは本当にコンピュータ的に考えるのです。「謎」というのはごんべんに米にしんのように書いて「謎」なのですけれども、一点しんのようにか二点しんのようにかということが、我々にとってはとてつもなく大事で、活字の紙の印刷屋にとってはすごく大事なのですけれども、インターネット上やコーマシャルで流れるのは、ほぼJIS字体といわれるコンピュータ字体が使われています。一般の方にとってはほとんど関係ないことだとは思っているのですけれども、僕は字の生い立ちを大事に見たいと思っています。



○参加者F氏 都立高校に勤務しています。2点お伺いします。1点目は、校閲の会社を興されてきて、なぜ本屋さんを運営したくなったのかという、そここのところの気持ち、本に対する気持ちをお聞かせいただければ。2点目、図書館は滞在するところだと言っていました。今、高校生の活字離れがすごく進んでおります。やっぱり本を読まないですけれども、学校図書館に来る子は何をしに来るかという、滞在しに来る。図書館が心地いい場所なのです。だから、そういう人にとって図書館というのは心地いい場所であってほしいと思うし、そういう場所を作っていきたいと我々は思っているのですけれども、ユーザーとして、あるいは校閲者として、図書館、滞在するところはこんなことがあったらいいな、というもの

があったら、お聞かせください。

○柳下 1 点目です。鷗来堂がなぜ神楽坂かというと、防衛省が市ヶ谷にありますね。あそこはもともと陸軍があって、太平洋戦争の前、日清戦争のあたりから、検閲をするようになります。だから、市ヶ谷に陸軍があったせいで、もしくはおかげで、大日本印刷や凸版印刷という印刷所、トーハン、日販という取次・流通がそこに集まったのです。その結果、北の音羽町に講談社、光文社、高橋書店などが、東の一ツ橋や神保町には出版社がいっぱいあり、飯田橋には角川さんがいます。だから神楽坂は地理的な中心地で、我々が届けやすく、紙を扱うので雨に濡れたくないことで神楽坂駅の近くに事務所を構えました。

そして会社の 2 件隣に文鳥堂という本屋がありました。この文鳥堂の前にはBooksミヤという本屋があって、今かもめブックスがある場所というのは、もう 60~70 年ずっと本屋だったという、神楽坂にとってはランドマークの本屋の場所だったのです。それが 2014 年 4 月のある日にパタンと閉まって、「何だ？これは」と思ったのです。本屋が無くなっていると聞いてはいたけれど、まさか自分のまちの、しかも「デザイナーや出版の編集者とかいっぱいいるお膝元の本屋が無くなるというのはどういうことだ」と思ったのです。自分に対する怒りにも近い、憤りですね。「神楽坂の人間は何をやっているのだ」、「本、買っていないのかよ」と。後にその本屋の店主さんにインタビューしたら、「本屋の息子は本を読んでいるから頭がよくてさ。いい大学行っていい会社に行くから、本屋なんか継がないじゃない」みたいなことを江戸っ子口調で言われました。本屋の高齢化と後継者問題というのは、隠れた問題、大きな問題だと思うのです。こんなことから、「本屋さんが無くなった場所で、売れない本を作っている我々って何なのだ

ろう」というすごく素朴な疑問に対して、一度自分たちで本屋さんというものをやってみようというのがもともとのスタートです。

本屋さんが無くなった後に本屋さんをやるので、いろいろな企画を考えました。例えば、「そもそも本ってなぜ読まれないのだろう」、「本が読まれるにはどうすればいいのだろう」など、仮説を一つずつ立てました。ずっとオンラインで情報があふれていると本は読めないですから、「本というのはオフラインの 40 分間を作り出すことなのではないか」、「読書というのは」など、いろいろ仮説を立てていって、かもめブックスというものを作ったのです。

あと、会社としてやる理由として、例えば、この先、鷗来堂というのは、どこまでいっても B to B の情報サービス業のような仕事なので、出版社がメインのお客さんですけれども、この先、校閲というのは、Twitter などの炎上を防ぐ技術にもつながります。情報を正確に伝えるための技術は、企業の広報、メーカーの情報発信、細かく見ればメール、プレゼンの資料、大統領のスピーチリーディングなどなど、全ての情報発信の場に使えるすごく有効な技術です。となると、これから B to B で鷗来堂のお客さんが増えてくるときに、少子化で、学生さんの数が減り、リクルートがしにくくなっていくときに、B to C といったユーザーの目に触れる形のものを持つておくことは、すごく有用性があるのではないかという打算もあります。

また、毎年、企業広告や CM で企業 PR をするよりも、リアル店舗を持つほうが安上がりなのではないかと考えました。以前、神保町の書泉グラデのところの大看板に、校閲募集の広告を出そうとしたら、広告費が 1 カ月で 100 万円ぐらいしたのです。極端ですが、月 50 万円の赤字を出しても

いいからリアルショップをやったほうが広告効果は高く、長期的なリクルートの芽になるのではないかと考えました。あと、出版の中では「男で本屋なんてやるのですか」という意見がすごく多かったです。「じゃあ、なぜ本なんて作るの?」「だって本は楽しいでしょう?」という単純なことですが、こんなことを考えて本屋を出しました。

2つ目がこんな図書館だったらいいなというものがあればということですね。

先ほどナショナルチェーンとインディペンデントという話をして、図書館というのは宿命的にナショナルチェーン、大型化するものだとお話ししましたが、それでも接点がいっぱいあるといいなと思います。

例えば、僕が本屋さんの企画をいくつか考えた中から紹介すると、仮に東京駅に本屋さんがつくれたら、棚を新横浜、名古屋、京都、新大阪、神戸という棚を作って、名古屋の棚には1時間40分ぐらいで読める本を集めて並べようと思います。さっきお話ししたオフラインの時間です。例えば、街の角に、「これぐらいの時間で、あるいはこんな気分の時に、読んでみてください」という本が並べられていて簡単に借りることができて、ポストに投函できて返せたりとかしたらいいのではと思います。単純に本を読むというときに、自分の知らなかった本に出会えるとか、「この本、面白いから読んでよ」といった、本を推すという基本的な動作をすることが街角とかにあって、接点が増えるといいと思います。

それから、人間のふれあいが無くて申しわけないですけれども、例えば、皆さんの図書館の入口のところに、自販機のような機械があって、ボタンを押すと夜中の2時でも本が借りられる。通常は、図書館に入って、本を探して、本を借りて、初めてだったら利用カードを書いて、そのときに

やっぱり40分、50分の時間を使う。その40分、50分を使うというのが豊かだし、本来的だと思うのです。一方で、割とデイリーで使っている者としては、この40分、50分を省略できたらいいなと思うことがわがままとしてあります。通常のワンアクション、ツーアクションが1つジャンプして省略できるといいのではと思います。

この他にもたくさんあるのですが、時間がきましたので、ここで終わりとさせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)